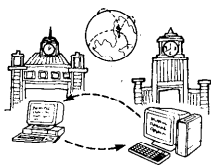
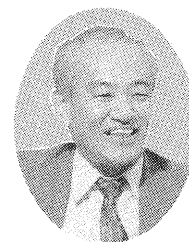


巻頭言



情報技術の標準化とオープン化

棟上 昭男[†]



情報処理の分野は、技術の面でもまたその利用の面でも、多様化や分散化が進み、さまざまな面でパラダイムシフトが起こっている。たとえば、ダウンサイジングやパーソナル化とともに、市場構造も急激に変化して、いわゆる垂直統合から水平統合の時代へと移行してきた。その背景には、これを支える技術の進歩と、大衆化ともいえる技術の広がりがあるわけで、マルチベンダリングのような形でその利益を等しく享受したいという、利用者側の要求が大きな圧力として働いている。

また一方供給側にとっては、以前のように技術を抱え込むのではなく、逆にキーとなる技術を公開し、これを使う仲間を増やすことによってパイを大きくする努力をしないと、商売自体が成り立ち難くなってしまおうということでもある。これまでのオフコンビジネスや、アップルが市場戦略の変更をせまられるのも、このような環境変化のなせる業であると言えるだろう。

水平統合の世界で、利用者にとって満足なシステムが実現できるためには、さまざまなシステムの構成要素に関する外部情報、あるいはインタフェース情報が十分明確に定義されていて、それを必要とする人には誰にでも自由に入手できるように、開放的であることが要求される。情報技術のオープン性とは、システム間の接続性とか移植性、あるいは一貫したヒューマンインタフェースの実現に必要なインタフェース情報が公開されていて、その変更のやり方等についても顕著な不公平がないことで、情報処理の世界の相互運用性の確保に欠くことのできない性質である。

このような意味で、インタフェースの標準は、情報技術に関連する標準の中でも、最も中心的で重要なものと考えられる。情報システムのインタフェースには、機械をソフトウェアやメディアを含む抽象的なものと考えれば、人間と人間、

人間と機械、機械と機械の3レベルが考えられる。仕様言語とか、文書のスタイルといったものは、人間と人間のインタフェースにも関連する約束事であると考えられることができるだろう。この中で特に注意を要するのは、人間と機械のインタフェースが、特定のグループ内では標準化が可能でも、一般的な標準化を考えるのは誤りだということである。標準化すべきなのは、好みの人間機械インタフェースの選択を可能にするインタフェースなのである。

いずれにせよ情報技術の標準化、とくに本学会の関与するような公的な標準化は、オープン性を確保するための最も基本的な手段であり、またそのような標準は、社会全体の共通の資産として維持されてゆくことが望ましい。インタフェースの標準規格は、本来システムの内部構造や造りとは独立な外部情報であり、著作権による保護の対象外とも考えられるのであるが、実際には自然言語や図表、あるいはより形式的な手法等による具体的な記述と不可分なために、グレー領域となって紛争の種となり易い。

IEEEやインターネットの例を持ち出すまでもなく、もともと情報技術に関する標準の分野で、学界が直接的に果たしてきた役割は非常に大きい。これまで当学会も、国際標準の分野でかなりの貢献をしてきているのであるが、ベースとなる技術の発信という点では、残念ながらその寄与は十分とは言えない。

曖昧さのない、一意性の保たれる記述手法や検証手法のような技術的問題の検討を始め、標準化に関する国際的ボランティア活動の支援、さらには公共性の高い共通資産としての標準の確保にいたるまで、本学会が見識のある中立団体として、この分野で果たしてゆくべき役割は、今後ますます大きくなるものと思われる。

[†] 本会情報規格調査会会長 情報処理振興事業協会 (IPA)

(平成7年2月8日)